

K-339

山形県最上郡真室川町文化財調査報告書第2集

鮭延城の歴史と現状

真室川町教育委員会

発刊にあたって

真室川町は、平成7年に町制施行45周年を迎えました。広大で豊かな自然環境に包まれ、先人たちがこの風土に培い育んできた歴史、文化、伝統など貴重なものが数多く残されており、また、厳しい気象条件のなかで培われてきた強い忍耐力と人情の厚い町民気質を創り上げてきました。

近年、真室川町は、産業・経済、教育、文化、福祉のあらゆる面において躍進をめざして努力してまいりましたが、今後、更にますますの期待がもたれています。

当町において、貴重な歴史的遺産の一つである中世の城館遺跡について、どのように保存して行くのか、また、文化財としてどのように利活用していくのか、ということが全国的に大きな課題となっています。こうしたことから、山形県教育委員会では、昭和63年から文化庁の補助事業として、県内の中世城館址の調査に取り組んでいます。

真室川町においては、昭和63年度から平成7年度まで、14の城館について調査が実施されました。この調査によって判明した歴史的事項を、平成7年3月に町文化財指定となった鮎延城址を中心とし本書でまとめたものです。

この本書は、城館をとおして歴史を振り返り、貴重な文化的遺産を未来に伝えていくために、広く町民の方々に興味をもって読んでいただけるものと考えております。

最後に調査・執筆された長澤正機氏には、あらためて敬意と感謝を表す次第です。

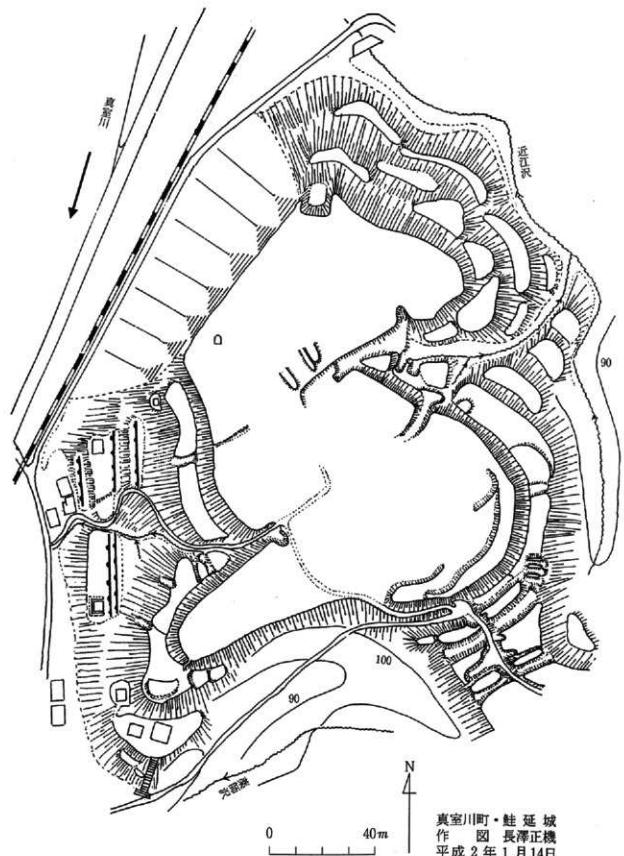
平成8年3月

真室川町教育委員会

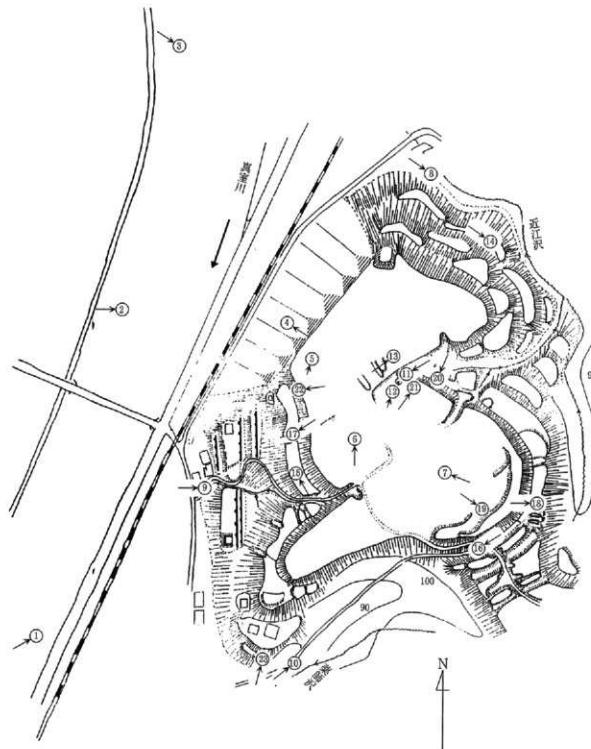
教育長 安藤光浩

目 次

1. 位 置	1
2. 城歴の概要	3
3. 現存する遺構の考察	5
(1) 大 手 門 道	6
(2) 揖 手 門	7
(3) 菓 師 沢 道	7
(4) 虎 口	8
(5) 枝 形	8
(6) 大手門、揖手門	9
(7) 曲 輪	10
(8) 帯 曲 輪	10
(9) 空 堀	11
(10) 堀 切	11
(11) 竪 掘	12
(12) 歓 縦 堀	12
(13) 土 畝	13
(14) 井 戸	14
(15) そ の 他	14
4. 小 括	16



鯉 延城 の 現 状 図 (縄 張り 図)



写 真 の 位 置 と 方 向

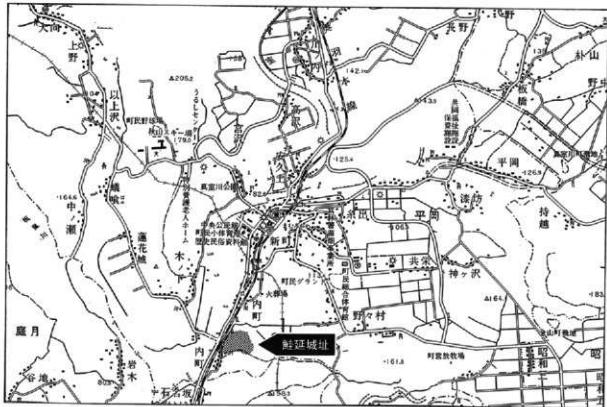
1. 位 置

鮭延城（別称 真室城）は、山形県最上郡真室川町大字内町字古城に所在する。真室川町と鮭川村との境界近くで、県道35号新庄真室川雄勝線と羽前豊里線が交わる真鶴橋の東側一帯にある。真室川町の南端にある内町集落の北々東に位置し、丘陵を舌状台地状にしてその上に中心城郭があった。この舌状台地は、標高110mから115mの高さにあり、東南東より北々西方向に伸びている。

中心城郭があった所から見て、西側に真室川が流れ、南側に薬師沢、北側に近江沢が流れている。東側は雑木林の平坦地が続くが、人為的なのか自然のか馬の背状に急にせばまつた所に、後述する堀切や土塁で境界をつくっている。西側斜面は国鉄（JR）奥羽本線工事によってほぼ破壊されている。南側斜面も地すべり防止工事によって一部破壊されている。

記念碑「鮭延城址」が台地西端部に建立されている。この石碑付近からの眺望はすこぶる絶景である。眼下に真室川が流れ、水田が広がっており、町の中心街や木の下集落さらには鮭川村の集落等々の新庄盆地を見下ろすことができる。晴れた日には鳥海山や月山を遠望できる。

中心城郭のあった所に行くには、近江沢沿いのかつての「大手門」（本来な



鮭延城の位置図

写真 ①



城全景
(南方より北方を)

写真 ②



真室川右岸より
城の西側を望む

ら表門となるのだが、標柱に「鮭延城址大手門」と明示しているので、本稿でも大手門の名称を用いることとする）を通ずる道、内町集落のほぼ北端にある「搦手門」（裏門に相当するが「搦手門跡」の標柱があるので、この名称を用いる）に向かう農道、内町集落ほぼ中央部に流れてきている薬師沢沿いの農道、そして野々村集落から堀切、土塁をめざしての薬師沢沿いの道に合流する山道の4つがある。いずれも小さな道で、徒歩でなければ行けない。中心城郭があった所は、数年前まで一部畑作地となっていた。そのためか、農道は歩きやすいが、「大手門道」の方は一部損失している所もある。

写真 ③

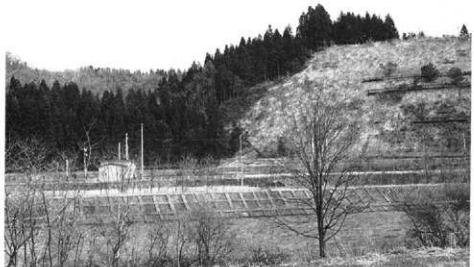


写真 ④



2. 城歴の概要

鮭延氏についての史料は、最後の城主越前守秀綱について若干みられるだけで、大正4年に正源寺が発行した「鮭延城記」によるところが大きい。昭和55年に発行された「鮭延城記 附関係資料」には、鮭延城記とともに「鮭延城時代書簡集（山形県史料編より）」「奥羽永慶軍記抄」「鮭延越前守秀綱公功績録」「鮭延寺開基の縁起」「佐藤七右衛門家文書抄」が記されている。また昭

和44年に発行された「真室川町史」の「第五章 鮭延城時代」には、鮭延氏の入部から没後まで詳細に記述されている。これらの関係資料に基づいて要約し、一般人向けの小資料となっているのが、真室川町歴史民俗資料館による「鮭延城」である。以下抜粋・要約する。

鮭延城は、真室川町大字内町字古城にあり、一名真室城とも呼ばれる。戦国時代、真室川地方を領した近江源氏、佐々木氏の居城であった。

佐々木氏は、近江の国の守護であったが、11代佐々木信綱が、近江の国を三

写真 ⑤



写真 ⑥





写真 ⑦

城郭のようす
(東方より西方を望む)

男、四方に二分して与え、佐々木六角、京極の二家ができ、近江を守護した。長男佐々木重綱は、不当だとして鎌倉幕府に訴えたがらちあかず、重綱の子佐々木綱村は、一族を率いて出羽国に下り、仙北の城主小野寺氏に仕えた。その後、23代佐々木貞綱のとき、鮭延莊を賜り、鮭延城を築いた。天文4年（1534）の時であった。

天正9年（1581）山形城主最上義光は、大軍を送って鮭延城を攻めた。当時18才の少年城主秀綱はこれと戦い、約4ヶ月に及ぶ籠城戦の末、最上家の和解の工作により軍門に降った。秀綱は鮭延越前守と名のり、各地の合戦には常に最上家の先鋒となって、勇名を轟かせた。

元和8年（1622）山形最上家は内粉のため改易された。これに伴って、秀綱は幕府老中の土井利勝に預けられた。客人扱いとなった秀綱は正保3年（1646）に古河土井家にて死去する。84才であった。

元和8年の最上家改易と同時に、鮭延城も一部破却されたが、新庄藩祖戸沢政盛は元和9年に一時期仮城として鮭延城に居を構えた。戸沢政盛は、沼田に寛永2年（1625）に新庄を築き、藩主以下家臣は全て新城に移り住み、鮭延城は廢城となった。

3. 現存する遺構の考察

廃城になってから、370年余になろうとしている。当時の縄張り図などの記

録はなく伝承によるのみである。その伝承も諸説がみられ、どれもが納得するが証拠付けは十分とはいえない。もっともこの時期の城はそれなりに構築替えが行われており、年が経るに従い変動がみられ、一線を画しての全貌は不可能に近い。また必要部分や全体の発掘調査等を行えば、それなりの成果を期待できるが、これとすぐには着手できない。現存する遺構の考察は、あくまでも現地表面の形状によるものであり、90年に及ぶ城歴の追求はできないが、同時期の同規模のそしてその研究成果をふまえて、特徴ある遺構のみにふれてみる。（伝承は、伝聞・私考が大半をしめているので、あえて取り上げず、研究史から考察することとする。）

(1) 「大手門道」

柱柱に「鮭延城大手門跡」とあるので、これを肯定した上で、ここに至る道を大手門道とする。城の北側を近江沢が流れているが、この近江沢沿いに作られたのが大手門道である。途中崩れてしまった所もあるが、荷馬車が通れるぐらいの道幅のしっかりした所もみられる。大手門直下あたりで道はわからなくなる。井戸のあった所や雨水が集りやすい所のためか、曲輪と曲輪の間に小さな谷ができてしまい、道そのものを壊してしまったととらえられる。この道は、表門に通する本道といえよう。



写真 ⑧

「大手門道」
(左下に近江沢
が流れる)

(2) からめてもん 「搦手門道」

これも標柱を肯定して搦手門道とする。一部住宅用私道にもなっているが、また防災工事などで整備されたことなどもあって、さらに農道にも大いに利用されたので、きちんと残っている。しかし当然ながら歩徒でしか上下できない。途中には曲輪そのものを一部利用しているところもあり、頂上部は堀切が利用されたのではないかと想定される。



(3) やくしざわ 薬師沢道



城郭東南に、東北から東南へ流れる薬師沢沿いにできた道である。この薬師沢は、近江沢から隧道を作つて取水している。耕作用の水となっており、管理がいいとされている。道そのものも農道となっているため、整備されており歩きやすい。頂上部は堀切を利用したといえる。城郭から野々村集落に通ずる道に合流する。この道はいわゆる裏街道としての役目を果たしていたのではないかと思われる。

(4) こ くち 虎口

虎口とは城の出入り口のことである。城は立てこもって守るだけではなく、攻撃の拠点でもあるから、城の虎口は厳重に締め切るだけでは用をなさず、機をみて討つて出るのに便利なようにもできていなくてはならない。「大手門」のすぐ西側にこの虎口が認められる。形状ははっきりしないが、坂虎口ととえられる。



(5) ます がた 柵形

虎口の防禦施設の一つで、土壘などで囲つて四角くした区画をさす。虎口から上り切った部分で、大手門の標柱のある南側に一部認められる。大手門とされている所も、場合によれば柵形になる可能性がある。土壘状が2列並んでいるからである。ただし、大手門の内側が城内であるので、その前方に構えるのが柵形になるため、大手門そのものの位置をどこに求めるかによってとらえ方

も異なってくる。虎口が坂虎口とすれば、食違い形か内枠形に位置づけられよう。



写真 ⑫

桁形
(標柱の右側)

(6) 「大手門」「搦手門」

遺構としては、大手門跡といわれる所に小さな土盛と集石部があるだけである。搦手門とされている部分は、堀切となっている所の西側に位置づけられる。それを証明する土盛等は見当たらない。いづれも当時の縄張り図が無いので、多分伝承による推定場所であろう。ただし、両者を結ぶ線より北側が南側より



写真 ⑬

「大手門跡」と標柱

もやや高めになっているので、鮎延城そのものが単郭ではなく複郭になる可能性を見出すことができる（耕作時での影響もあるだろうから断定できない）。

(7) く る わ

郭（くるわ）とも書くが、県の中世城館址調査会では曲輪（くるわ）を用いている。曲輪は中世の山城に多くつくられた。傾斜地を削平してつくり出す。高い面を削った土を低い面に盛り上げ、水平にする方法である。その周縁に土塁を築くこともある。また崖端を整えて急傾斜の下降壁面をつくるのが通常である。このようにして周囲から侵入し難く加工した平場を総称して曲輪という。大きさや形などの統一性がない。鮎延城にも相当数の曲輪（現状図の斜面の部分の空白地）がみられる。



写真 ⑭

曲輪の一部
(北斜面)

(8) お び く る わ

山城の山上の平場に対して、その山腹に取り付いた形の細長い曲輪のことである。腰曲輪とか馬場道などといわれることもある。鮎延城には、東側と西側の斜面に帯曲輪がみられる。なお西側の帯曲輪は、堅堀で切ったり2本の堅堀を落としたりしている。防禦面で興味深い。



写真 ⑯

帯曲輪の一部
(西斜面)

(9) 空堀

水堀に対して、水を貯えない堀のことと、中世城館によくみられる遺構である。鮭延城には明確な空堀はみられない。既述の薬師沢道山上部に、堀切がみられるが、部分破壊もあって、空堀と断定し難い。山城なので、むしろ堀切の方が妥当である。

(10) 堀切



写真 ⑯

堀切と土塁
(薬師沢道の山頂部)

連続する山頂部の尾根などに、敵方の攻撃を阻止する目的で掘削した構造をいう。いわば、城の最端に位置するが、曲輪や城郭位置にもみられる。鮭延城にもいくつかの堀切があるが、東南に続く尾根にみられるのが特筆される。最も内側のものは、帯曲輪に連続するし、薬師沢道にも利用されている。2番目ものは、北東部に後述する敵堅堀に直交するようにつくられている。3番目も尾根左右にみごとにつくられている。その下部は急斜面となっている。

(11) 堪堀

敵兵が横に動くのを阻止する目的でつくられたという堀で、急斜面に沿って削りを入れたものである。鮭延城の西斜面の帯曲輪には、全部で4本の堅堀がみられる。特により北西部の堅堀は帯曲輪を2分断するかのように急斜面に削りを入れている。またより南西部の堅堀は、帯曲輪そのものを生かしてその平坦部から急斜面に平行するように掘り下げている。



写真 ⑰

堅堀
(西斜面)

(12) 敵堅堀

畑作をする時に敵をつくるが、このような敵を斜面に沿って平行状につくったのが敵堅堀である。本城には、(10)で記した堀切に直交するように、4本の敵堅堀がみられる。いずれも小さなもので、なぜこの位置に構えたのか判断に苦しむ。もっとも、この敵堅堀そのものの意義がいろいろあって、形状、規模ともに一定化していない。今後追求されるべき遺構である。



写真 ⑯

畝 竪 堀
(東斜面)

(13) 「土 壁」

堀とすべき部分の土を掘り、その土をもって築きあげた（積き上げた）ものは土壁である（平地をつくる時に寄せ集めた土を積み上げたものもある）。(9)で記した堀切の所に3本の土壁がみられる。中間に位置するものは、一部破壊されているが、より内側とより外側のそれはほぼ残存している。城郭内では、南東端にやや貧弱であるがみられる。地形からみて、野々村集落方面からの攻撃に備えるために、堀切や土壁を多用したものといえる。



写真 ⑰

土 壁
(城郭南東部)

(14) 「井 戸 戸」

三方が川や沢で囲まれているが、飲用水は近くに求めたはずである。しかし井戸そのものと断定できる所は見つかっていない。可能性としては、大手門のあった所のすぐ東側斜面の石囲みを上げることができる。普段は出水や流水がみられないが、水の流れていた跡や石囲みがあることなどから、井戸と思われる。発掘調査して確認したいものである。場所的にも好都合といえる。



写真 ⑱

井 戸 跡 か
(「大手門」の東側斜面)

(15) そ の 他



写真 ⑲

ヤダケの群生
(橋形の東側一帯)



写真 ②

サイカチの大木
(西端斜面)

直接鮎延城に関わる遺構ではないが、城にまつわる植物群を記してみる。弓矢の矢柄に使用されたといわれる「ヤダケ」は大手門跡地付近から東側に群生している。洗濯用や薬として用いたといわれる「サイカチ」は、城郭西端に大



写真 ③

薬師神社

木としてみられる。食用としての「タラノキ」「ウコギ」などもみられる。

神社は、内町集落背面（城の北西部）に「薬師神社」「山神」「稻荷神社」がみられる。特に薬師神社から見つかった「薬師如来倚像」は、白鳳時代の作といわれ、国の重要文化財に指定されている。

4. 小 括

鮎延城は、築城年代、城主、廃城年代が明らかな城である。縄張り図などが無いため、伝承や残存遺構からのみ形状を知るにすぎない。しかし、三代90年間に及ぶ城として、廃城後370年余も経ったのに、一部破壊があるにせよ遺構はよく残っている。当地方の城館址の代表例でもあり、今後とも保存されるべきものである。

城郭の内部は、皆目わからない。畠地として利用されていたが、深耕していないとすれば発掘調査等で建物跡などを追求できるであろうし、生活そのものも解明できるかもしれない。これには、学術的かつ科学的な調査に依らなければならない。

真室川町文化財調査報告書 第2集

鮎延城の歴史と現状

平成8年3月27日発行

著者 長澤正機

発行 真室川町教育委員会

山形県最上郡真室川町大字新町233-1

電話 (0233) 62-2305

印刷 備みどり印刷

電話 (0233) 22-6626